

上田市文化財調査報告書第53集

八幡裏遺跡 I

長野県職員住宅建設事業に伴う八幡裏遺跡発掘調査報告書

1995. 3

上田市教育委員会
長野県住宅供給公社

序

わが上田市にも、いよいよ高速道・新幹線がその姿を現すとともに、市内いたる所で開発事業が行われています。それと共に、私たちの祖先が遺した貴重な文化財が次々と失われています。特に、埋蔵文化財については、その姿が目には触れないため、その保護について皆さんの理解を得ることが難しく、ややもすると、「目の上のたんこぶ」のように扱われることがままあります。

このたびの長野県職員住宅の建設事業に伴い実施された八幡裏遺跡の発掘調査に際しては、開発事業者の長野県住宅供給公社・長野県土地開発公社の皆さまに、こうした遺跡の現状と、その保護について深いご理解をいただき、工期の調整や、調査の進捗についてご協力をいただき、無事調査を終了することができました。その成果については、本文の中でご報告いたしますが、従来、太郎山麓には遺跡が少ない、といわれてきましたが、今回の調査により、遺跡が少ないのではなく、太郎山からの土砂の流入により、遺跡が地中深く埋没していることが判明し、この成果が、本年引き続き調査した国立新病院（長野）の建設に伴う同遺跡の確認調査にも反映され、従来では確認しなかった、地下2～3mまでの深掘による遺跡の確認ができました。ここに衷心より感謝申し上げます。

埋蔵文化財の発掘調査が、「開発事業の露払い」ではなく、真に地域の歴史解明の一助となり、上田市の今後の道標となるために、皆さまのいよいよのご理解とご協力をお願いしつつ、序といたします。

平成7年3月

上田市教育委員会教育長 内藤 尚

例 言

- 1 本書は、長野県上田市大字上田字大屋西 2,470-1,2,4番地における、長野県職員住宅建設事業に伴う、八幡裏遺跡Ⅰ発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成6年4月18日から5月23日まで現地調査を行い、引き続き、平成7年3月25日まで整理・報告書作成作業を実施した。
- 3 調査は、長野県住宅供給公社の委託を受け、上田市が直営で実施した。なお、事務局は、上田市教育委員会事務局社会教育課が担当した。
- 4 遺構の実測は、(株)新日本航業に委託して実施し、トレースは、市村みつ子が行った。
- 5 遺物の洗浄・注記・接合・実測・観察・トレース・版組は、中沢徳士の指示により、荒井かぎ子・市村・大井敬子・小野沢恵美子・唐沢裕子・田中弥重子・樋口眞知子が行った。
- 6 遺構・遺物写真の撮影は中沢が行い、遺跡全体撮影は(株)新日本航業に委託して実施した。
- 7 本調査にかかる資料は、上田市立信濃国分寺資料館に保管してある。
- 8 本書の編集・刊行は、事務局が行った。
- 9 本調査にあたり、長野県・長野県教育委員会・長野県住宅供給公社・長野県土地開発公社・新田自治会の皆さんに御指導・御協力をいただいた。記して感謝する次第である。
- 10 本調査にかかる調査の体制は、次のとおりである。

上田市教育委員会	教 育 長	内 藤 尚
同	教 育 次 長	荒 井 鉄 雄 (平成6年4月25日着任)
同	社会教育課長	須 藤 清 彬 (平成6年4月24日退任)
同	同	松 沢 征 太 郎 (平成6年4月25日着任)
同	文 化 係 長	岡 田 洋 一
同	主 査	中 沢 徳 士 (調査担当者)
同	主 任 事	尾 見 智 志
同	主 事	久 保 田 敦 子
同	同	塩 崎 幸 夫
同	同	清 水 彰
同	嘱 託	西 入 元 三 郎

- 11 調査に参加・協力していただいた方々 (順不同・敬称略)
(現地調査) 井部定雄、林正治、前村浩、小柳治雄、中村美奈子、伯耆博子、阿部節子、川上初枝、荒井かぎ子、竹内和好
(整理作業) 荒井かぎ子、市村みつ子、大井敬子、小野沢恵美子、唐沢裕子、田中弥重子、樋口眞知子

凡 例

遺 構

- 1 遺構は、次の（ ）内に示す略号で表し、続く番号は任意である。
堅穴住居址（S B -）、土壇（S K -）、ピット（P -）
- 2 遺構の図版は、国家座標による真北を頁の上とした。
- 3 遺構実測図は、原図1/20、縮尺1/3 とした。
- 4 堅穴住居址（S B -）の主軸方位は、国家座標の真北と竈を通る住居址の中軸線とのなす角度で示した。
- 5 遺構図中の網点は、焼土を示す。
- 6 遺構写真の縮小は任意である。

遺 物

- 1 遺物実測図は、原図1/1、縮尺1/3 とした。
- 2 土器の実測方法は、右1/2 に断面及び内面を、左1/2 に外面を記録する4分割法を原則とした。
- 3 出土遺物一覧表の器質は、胎土を「胎」、焼成を「焼」、色調を「色」と記載した。
なお、色調は、遺物の内面及び外面のベースとなる色調を、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の『新版標準土色帖』を用いて判別した。
- 4 遺物番号は、実測図版番号及び写真図版番号と一致している。
- 5 遺物写真の縮小は任意である。

目 次

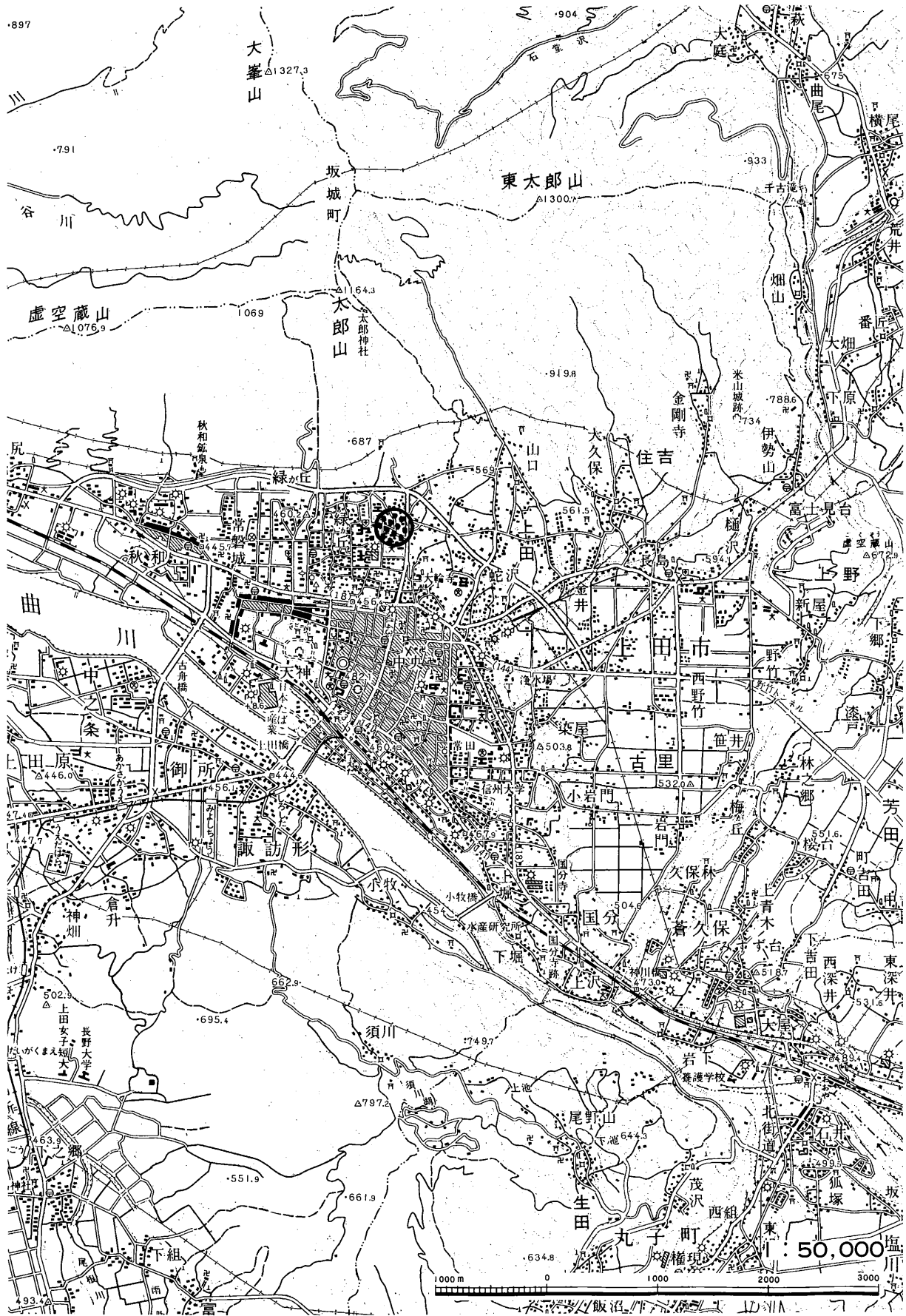
序

例言

凡例

目次

第一章	序説	1
	第1節 調査の経過	1
	第2節 調査の方法	1
	第3節 調査日誌	1
	第4節 調査報告書抄録	2
第二章	環境	3
	第1節 自然環境	3
	第2節 歴史環境	6
	第3節 遺跡の基本層序	6
第三章	調査の結果	7
	1 遺構	7
	2 出土遺物	17
	写真図版	19



「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 平元関複 第335号」

第1図 八幡裏遺跡の位置

第一章 序 説

第1節 調査の経過

平成5年秋、長野県住宅供給公社・長野県土地開発公社から、上田市大字上田字大屋西に、長野県の職員住宅を建設したいという申し入れがあった。上田市教育委員会事務局社会教育課（以下「事務局」という。）で、遺跡分布地図・分布調査報告書を確認すると、該当する土地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「八幡裏遺跡」と「大屋西遺跡」の間に接するように所在し、場合によれば、遺跡が該当地にまで広がっている可能性があるため、事前に試掘調査を実施して、その結果をみて対応することとした。

平成5年12月3日、試掘調査を実施したところ、（上田市文化財調査報告書第52集「市内遺跡Ⅲ」参照）表土から1mほど下のレベルから、2×2mの方形の住居址のほか、いくつかのピットを検出した。この結果、建設事業に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図る必要が生じた。

平成6年4月13日、長野県住宅供給公社と上田市との間で、調査対象面積1,000㎡、事業費5,500,000円の遺跡発掘調査に係る委託契約を締結した。事務局では、4月18日調査に着手し、現地調査は5月23日に終了した。

当初は、平成6年度に現地調査と遺物整理の一部を実施し、平成7年度に残る遺物整理と報告書の刊行を実施する予定であったが、調査の結果、予想されたものほど遺構・遺物が出土しなかったため、平成6年度中に報告書の刊行まで実施することとした。なお、これによる契約金額・期間の変更はなく、平成7年3月25日、本報告書を刊行して、すべての調査を終了した。

第2節 調査の方法

遺跡名は、当初その所在の字から、「大屋西遺跡」として前出の「市内遺跡Ⅲ」に報告したが、遺跡の性格から、むしろ「八幡裏遺跡」に含めたほうが適当であると判断した。「八幡裏遺跡」は、上田市の分布調査では、「思川遺跡」「大屋前遺跡」「海善寺裏遺跡」「新田遺跡」「道祖神遺跡」「八幡東遺跡」「八幡裏遺跡」の7つの遺跡をくくった、むしろ遺跡群で、いずれもその分布範囲は明らかでなく、縄文中期から土師後期までを出土している。記録の便宜を図るため、遺跡記号としてHachi-Man-Uraの「HMU」と、同遺跡の隣接する東信病院敷地内での調査があったため、これと区別するため、「HMU-I」を与えた。各種の記録や遺物の注記等は、この記号を用いている。（なお、東信病院敷地内での調査については、「HMU-II」とした。）

調査区域の設定は、職員住宅の建設により破壊される範囲＝建物敷地のみを行うこととした。ほかの部分については、地下遺構まで達する施工がないため、現状保存を図った。

調査に当たっては、表土の排除はバックホーを用い、その後の遺構検出・掘り上げはすべて人力によった。遺構測量については、専門業者に委託して実施した。

第3節 調査日誌

平成6年

4/18 調査着手 バックホーによる表土剥ぎ（～4/23）

4/25 作業員による遺構検出作業（～4/27）

4/27 遺構掘り上げ作業（～5/16）

5/23 バルーンによる空中写真測量。機材搬出。現地調査終了。

この後、上田市立清明小学校内の埋蔵文化財整理室において遺物整理作業、報告書作成を実施し、平成7年3月25日、調査報告書を刊行してすべての調査事業を終了した。

第4節 報告書抄録

ふりがな	はちまんうらいせきのいち
書名	八幡裏遺跡 I
副書名	八幡裏遺跡 I 発掘調査報告書
シリーズ名	上田市文化財調査報告書
シリーズ番号	第53集
編著者名	中沢徳士
編集機関	上田市教育委員会
所在地	☎386 長野県上田市天神二丁目4番74号
発行年月日	1995年3月25日
収所遺跡名 (ふりがな)	八幡裏遺跡 (はちまんうらいせき)
所在地 (しよざいち)	上田市大字上田字大星西 (うえだしおおざうえだあざおほしにし)
コード (市町村・遺跡番号)	20203・
北緯・東経 (° ' ")	36° 24' 40" ・ 138° 15' 23"
調査期間	平成6年度 (1994. 4/18~5/23)
調査面積 m ²	1,000 m ²
調査原因	長野県職員住宅建設事業に伴う事前調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
八幡裏遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居址1件	土師器・須恵器	

第二章 環 境

第1節 自然環境

上田盆地の地形

上田盆地の地形は、千曲川の右岸と左岸にわけてみるができる。千曲川右岸は、この盆地の北に屏風のように聳立している太郎山脈と烏帽子火山群の山麓の殿城山に囲まれる。平地は、太郎山脈と烏帽子火山群の山麓線が、神川の出口で鈍角に交わり、千曲川を底辺として三角形に展開している。左岸は北西方に川西山地、浦野川を挟んで西部には、川西丘陵、塩田山地、独鈷山脈と小牧山に囲まれている。産川はこれらの山々を水源とし、塩田平と呼ばれる市内でも最も広い面積を有する平地をつくる。また、小牧山塊は上田盆地の中央に横たわり、両岸の地域はこの山塊の北西方でたがいに狭まって連続している。平地の全体の形としては、不規則なそら豆状または繭状をなし、広さはあわせて約90k㎡で、松本盆地・長野盆地に比べると小さく、形状も複雑である。

遺跡周辺の地形

千曲川右岸は、太郎山脈と烏帽子火山群の裾野と、それらの山々に囲まれる平地で形成される。ここが凹地形となったのは、地向斜性の地殻運動と断層による陥没のためと考えられているが、そのほか、太郎山脈の溪谷や神川や千曲川が、扇状地や河岸段丘などを造って今日の形態にしたのである。

太郎山脈は上田市の北に聳え立ち、坂城町・真田町との境をなす。中央で黄金沢の溪谷が太郎山(1,164 m)と最高峰の東太郎山(1,300 m)に分けている。これから西方の山頂線は多少の凹凸を見せ、岩石がちで、植生もよくない。その南斜面は急峻で山麓線は直線的に上田盆地に接している。それに対して、黄金沢の東方は、趣を異にし、その南面に丘陵性の尾根ができており、さらに東方南面には丘陵性の台地が付属している。

神川は矢沢の狭隘部を頂点として一大扇状地を展開している。この川は、右岸に1段、左岸に3段の段丘面を形成し、土地の隆起にしたがって、西方に移動したことを物語っている。

太郎山脈の南にはいくつかの河谷が数えられ、その谷の出口には扇状地や崖錐が発達している。この中で最も大きくみごとなのは黄金沢の扇状地で、その扇頂部に山口という谷集落があり、扇状部は一面りんご園となっていたが、最近宅地化が進んでいる。この扇状地の南は矢出沢川に切られるが、西側は千曲川第1段丘を崩壊して、第2段丘面上にかかり、その扇末部は虚空蔵沢の出口まで及んでいる。ここは、地下水が得やすく湧き水も多い。この扇状地の西方では太郎山が直接平地に接し、いくつかの小溪谷の出口に崖錐が形成されている。虚空蔵沢や声沢の出口がそれで、城下町形成以前には集落が形成されていた。また、西方の魚の沢扇状地の末端部には秋和鉱泉がある。これに対し、東方では丘陵性の尾根が突出し、それに抱かれた凹地や谷間が集落で埋められ、大久保・金剛寺・伊勢山と、みごとな入集落を形成している。

また、この地は山に囲まれているが、ところどころで切れて、隣接の地域との出入口となる狭隘部がある。大きいものでは、先にあげた神川の矢沢狭隘のほか、千曲川の岩鼻の狭隘がある。これは、上田盆地の西の門戸ともいべき狭隘部であり、太郎山脈の虚空蔵山(1,076m)と川西山地の城山(933m)が相対峙する場所で、対岸の山とは僅か500mにすぎない。

千曲川沿岸には、みごとな段丘が発達している。特に神川の合流する国分付近は、ひな段のように4段になっている。上堀から下流では3つの平坦面となり、いずれも著しく広くなる。第2の面は上田市街で埋まり、第3の面は千曲川の氾濫源であるが、市街地はここまで広がっている。

さて、今回調査した八幡裏遺跡は、太郎山の南斜面の黄金沢扇状地の西側、和合沢の小扇状地付近の比較的緩やかな斜面に位置し、標高約470m前後をはかる。



第2図 八幡裏遺跡 I 発掘調査周辺遺跡分布図

番号	時代	名称	所在地	備考
38	縄文	入詰遺跡	住吉字入詰	
39	縄文・弥生	中道遺跡	〃 中道	
42	古墳	玄蕃塚古墳	〃 横山	半壊
44	縄文	熱泰寺遺跡	〃 熱泰寺	
52	弥生～平安	染屋台条里水田跡遺跡	上野・住吉・古里・国分	
54	〃	国分遺跡群	国分字古城・堂浦・屋敷	
55	奈良	信濃国分寺跡	〃 仁王堂・堂浦	国指定史跡
56	縄文～平安	国分寺周辺遺跡群	〃 〃 ・明神前外	1994県埋文センター調査
57	〃	常入遺跡群	常入字堀の内・中常田外	
58	〃	金井裏遺跡	上田字金井裏・蟹沢	1985上田市調査
59	弥生・平安	東奥山原遺跡	〃 東奥山原	
60	古墳	二子塚古墳	〃 秋葉裏	前方後円墳・上田市指定史跡
61	縄文・古墳	大屋西遺跡	〃 大屋西	
62	弥生・平安	雁堀遺跡	〃 雁堀	
63	平安	西丘遺跡	〃 西丘	
64	縄文～平安	八幡裏遺跡	〃 思川・八幡裏外	1994一次・二次調査実施
65	弥生・平安	海野遺跡	〃 海野	
66	近世	上田城跡	〃 二の丸	国指定史跡・1990～調査中
67	縄文～平安	上平遺跡	常磐城字上平	
68	平安	殿田遺跡	〃 横畑・仁王田	1985上田市調査
69	〃	七反田遺跡	〃 七反田	
87	古墳	たたら塚古墳	諏訪形字東山	上田市指定史跡
92	〃	上平古墳	〃 上平	
93	〃	森の木1号古墳	〃 森の木	全壊
94	〃	森の木2号古墳	〃 〃	僅かに残る
95	縄文	渋取田遺跡	〃 渋取田・中堰	
96	平安	中沢遺跡	〃 中沢	
A	古墳	豊原古墳	常磐城字豊原	1988上田市発見・調査
B		宮平遺跡	上田字宮平	1994県埋文センター発見・調査

第1表 八幡裏遺跡の周辺遺跡一覧表

第2節 歴史環境

太郎山南麓斜面一帯の遺跡を概観すると、東側の黄金沢扇状地から西の千曲川第2段丘面にある秋和集落付近までに、かなりの遺跡分布がみられる。時代的にも縄文期から奈良・平安期にいたるまでの遺跡が確認できる。特に、常磐城から塩尻地区の山麓線に沿って、古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺跡が集中していることが注目される。

縄文時代の遺跡としては、国立東信病院の敷地内を中心とした本遺跡(64)があげられる。本遺跡は、昭和27年の病院改築工事に伴って、五十嵐幹雄氏により発見されたもので、敷石住居址とともに、中期の加曾利E式、後期の堀之内・加曾利B式と、磨製石斧、打製石斧、ニホンジカ・イノシシなどの獣骨も出土している。さらに、本年度の国立新病院の建設工事に伴う発掘調査においても、後期の敷石住居址とともに、石棺墓や縄文人骨、獣骨も出土している。

一帯における弥生時代の遺跡は、本遺跡の南端、八幡神社付近や、上平遺跡(67)にみられるが、全体としては、上田市街地の平坦面に多く分布する。上平遺跡からは、昭和43年の発掘調査の際、後期の箱清水式土器などを確認する一方、本遺跡の南端からは、古く上田丸子電鉄の電車線敷設のおり、中期の小形壺などが確認されている。

古墳時代になると、雁堀遺跡(62)や、二子塚古墳(60)周辺で集落遺跡がみられるが、遺構については、本調査が初見となる。古墳については、秋和の大蔵京古墳と二子塚古墳、豊原古墳(A)などがあげられる。大蔵京古墳は、秋和集落の北西にある豊秋霧原野神社境内にある方墳で、基底部の一辺が約30m、高さ約6mを計る。墳丘の北側面に段を作り、葺石とみられる石列が一部にみられる。築造年代は、4世紀末から5世紀初頭に比定されている。二子塚古墳は、東信地区唯一の前方後円墳として知られ、周辺には4基の陪塚をもつ。中軸線の総長約51m、前方部の長さ約26m、最大幅約25m、高さ5m、後円部の長さ約25m、最大幅約39m、高さ6mを計る。現在は、後円部に神社社殿が建ち、前方部には石祠が祭られ、墳丘各所も削平されている。また、北側には周溝の名残もみられる。この古墳からは円筒埴輪の破片が出土しており、6世紀前半の築造と考えられている。後期古墳としては、秋和・塩尻地区周辺に、かつては6基ほどが確認されていたが、そのほとんどが破壊されている。

奈良・平安時代になると、遺跡数は増加するものの、現在まで調査された上平遺跡、殿田遺跡(68)、金井裏遺跡(58)いずれも密度は薄く、本年度の国立新病院の建設工事に伴う発掘調査においても、調査面積8,000㎡に10軒足らずであった。

中世以降は、太郎山中腹に山城が形成され、その麓に城下町が形成されているが、この城下町に関して確かな遺構は確認されていない。近世、真田氏による上田城下町の形成により、こうした太郎山麓の村々が上田城の周辺に集められ、現在の市街地の基礎を形成している。近代には、遺跡周辺一帯は蚕都上田を支える桑園として利用されていたが、都市化の波に押され、現在は、南面する優良住宅地としてそのほとんどが宅地となっている。

第3節 基本層序

本遺跡の基本層序は、右に示すとおりである。おおむね扇状地を形成した際の、山からの押し出しによる砂質土によって構成され、拳大以下の礫も多く含む。

3は遺物包含層であるが、遺物の包含量はごく僅かである。遺構は、4層もしくは5層から検出されるが、基本的に隆起する上田盆地の遺跡としては、異例に深い箇所にも検出されるが、これが、単なる押し出しによる被覆か、あるいは、この山麓の沈降現象によるものか、今後の研究が待たれる。

GL		(単位 cm)
	1 埋土中心の表土	
-40		
	2 褐灰色砂質土	
-60		
	3 小礫混褐色砂質土	
-80		
	4 礫の多い黄灰色土	
-100		
	5 弱粘質黄灰色土	
-120		

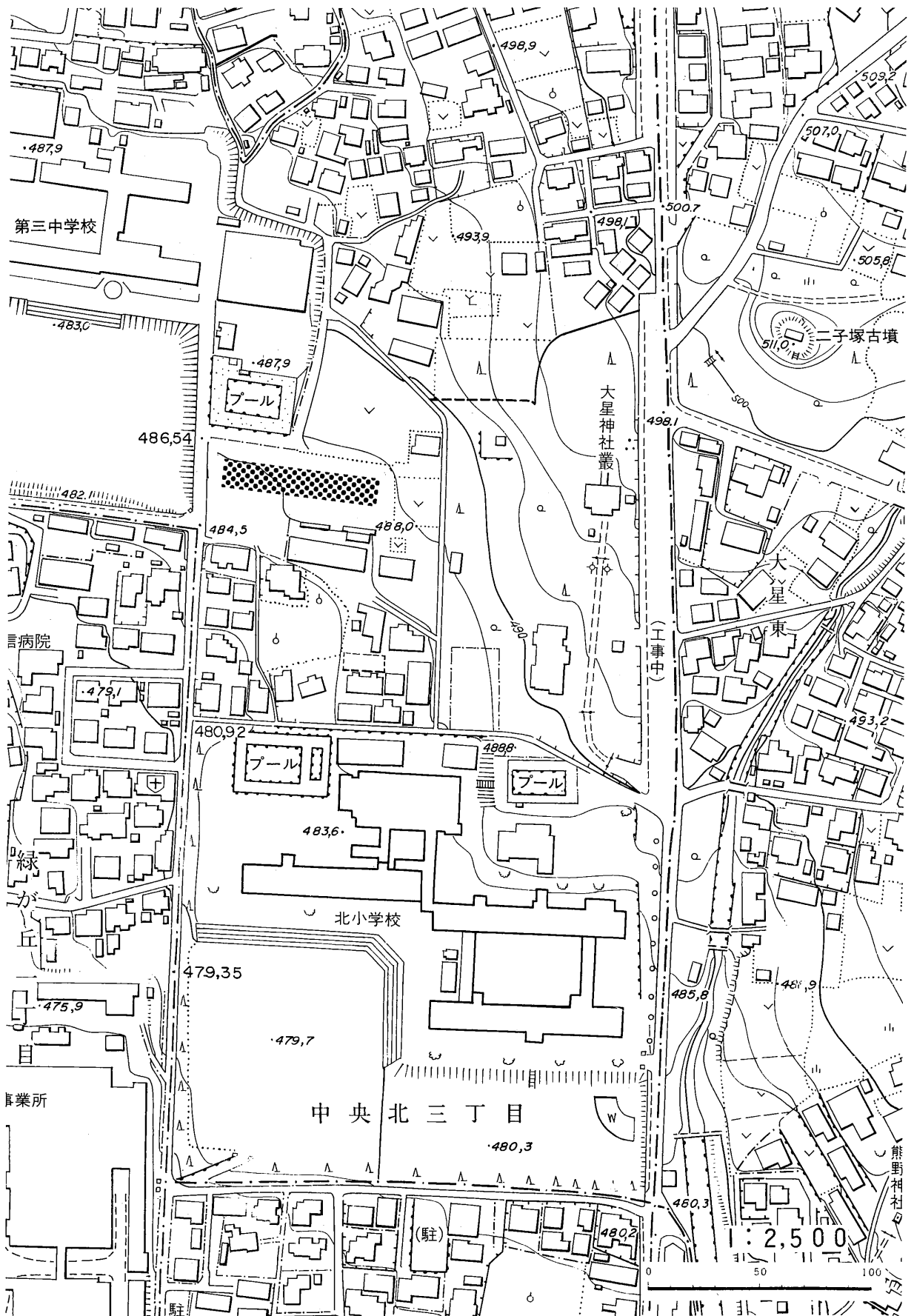
第三章 調査の結果

1 遺 構

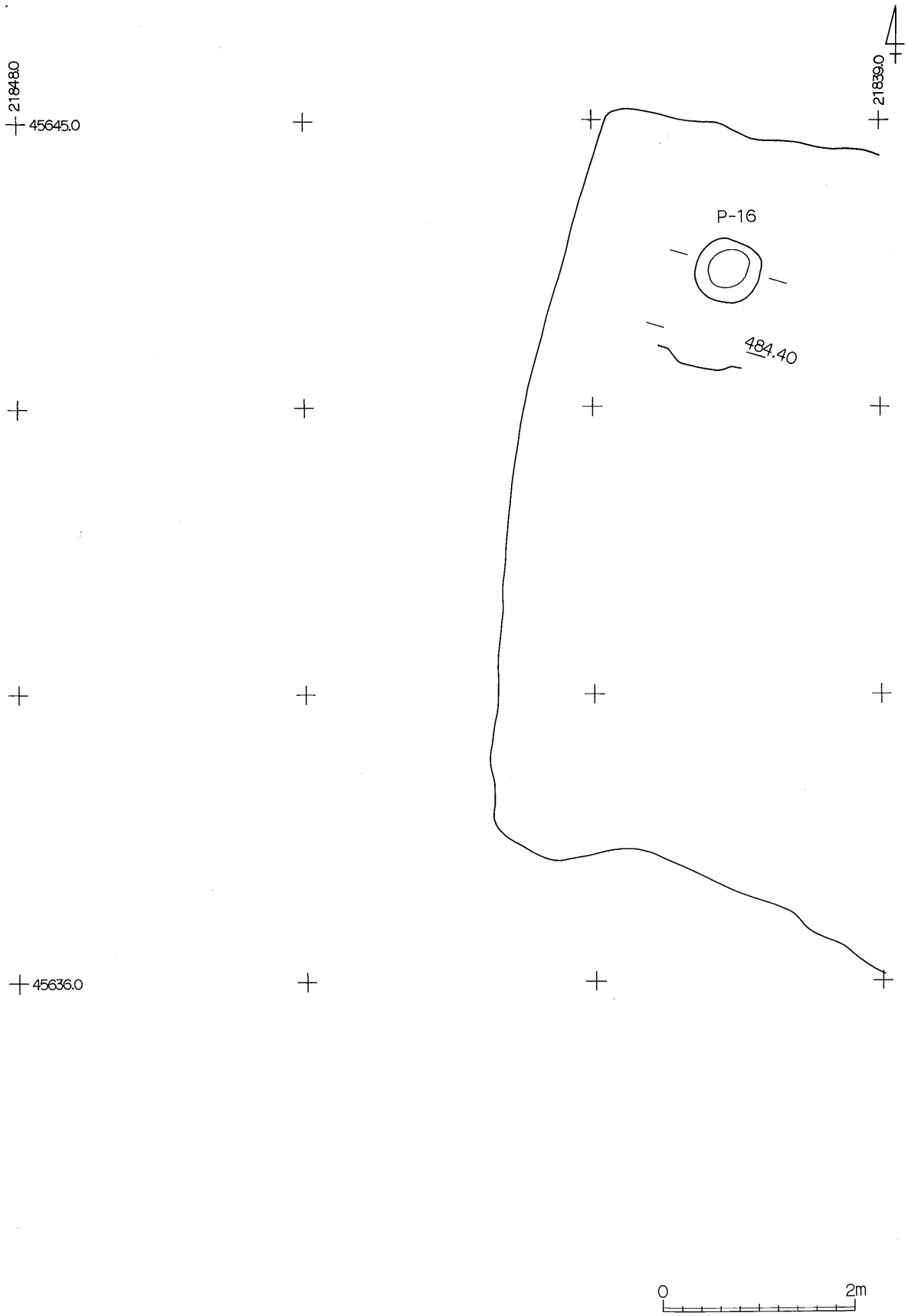
調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居址1件のほか、土壇9件、ピット19件が検出された。住居址は、平面形態が隅丸方形を呈し、規模は、3.43×3.23m、床面積は3.64㎡を計る。竈を通る中軸線はN-5.0°-Eで、壁の残高は、0.08~0.24m、床面の標高は、484.96~485.03mである。柱穴はなく、覆土は、小礫を多く含む褐灰色の砂質土であり、壁の内側には、拳から頭大の礫が取り囲むように検出された。竈は、北壁の中央東寄りに検出されたが、ほぼ壊滅状態であった。土壇・ピットについては、下表に示すとおりである。

遺 構	長 径	短 径	深 さ	備 考	遺 構	長 径	短 径	深 さ	備 考
SK-01	1.68	1.19	0.45	隅丸長方形	P-06	0.80		0.19	
SK-02	1.78	1.19	1.31	楕円形	P-07	0.36	0.35	0.17	
SK-03	0.93	0.86	0.19	隅丸方形	P-08	0.55	0.40	0.18	
SK-04	1.08	0.83	0.16	隅丸長方形	P-09	0.56	0.47	0.22	
SK-05	1.38	0.80	0.20	楕円形	P-10	0.39	0.32	0.17	
SK-06	1.46	0.97	0.42	〃	P-11	0.46	0.43	0.13	
SK-07	2.50		0.33		P-12	0.65	0.46	0.14	
SK-08	1.57	0.98	0.32	楕円形	P-13	0.60	0.52	0.27	
SK-09	1.52	1.40	0.07		P-14	0.50	0.48	0.27	
P-01	0.38	0.35	0.20		P-15	0.59	0.46	0.20	
P-02	0.74	0.53	0.12		P-16	0.67	0.65	0.13	
P-03	0.47	0.30	0.18		P-17	0.41	0.33	0.14	
P-04	0.38	0.36	0.19		P-18	0.86	0.74	0.10	
P-05	0.64	0.47	0.26		P-19	0.48	0.43	0.06	

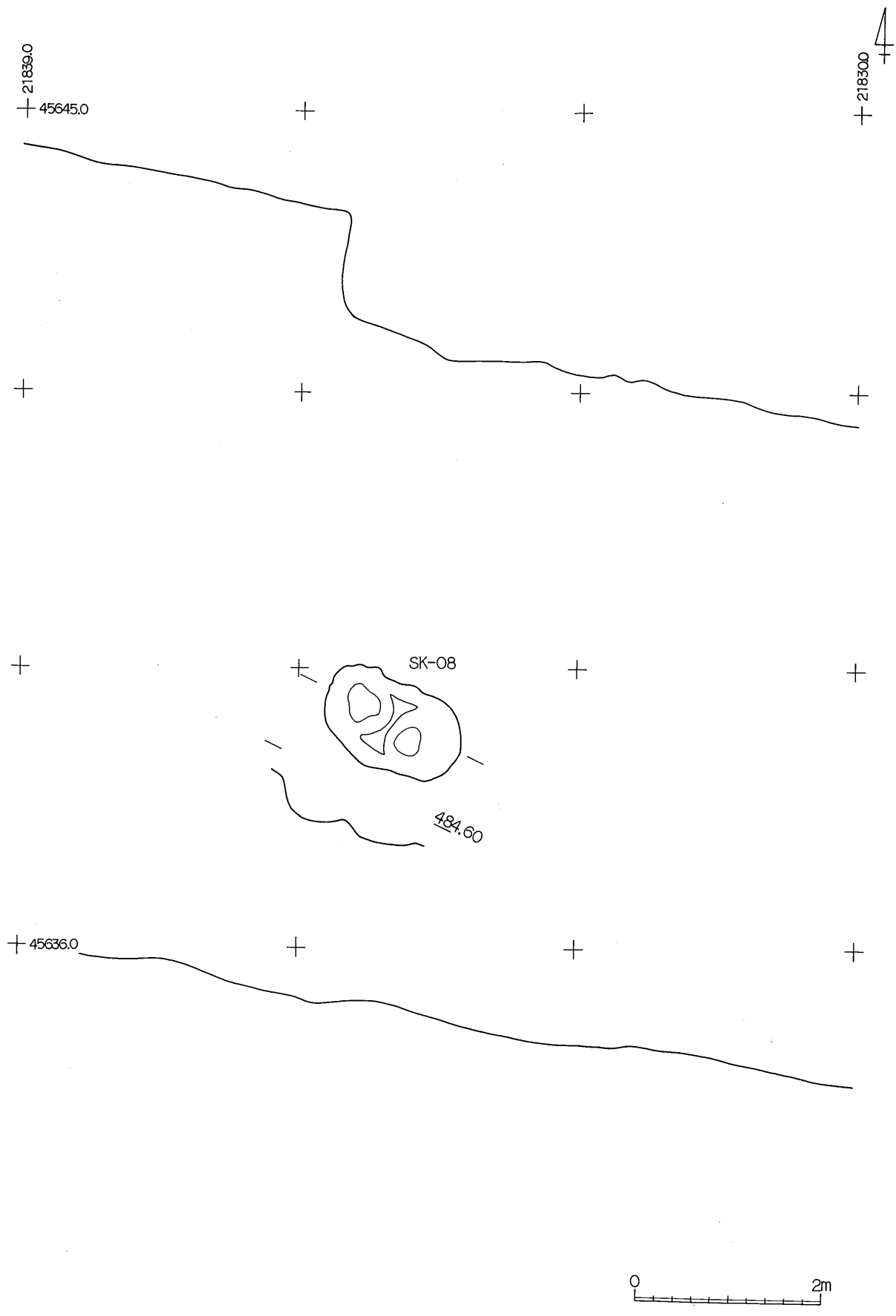
第2表 土壇・ピット一覧表



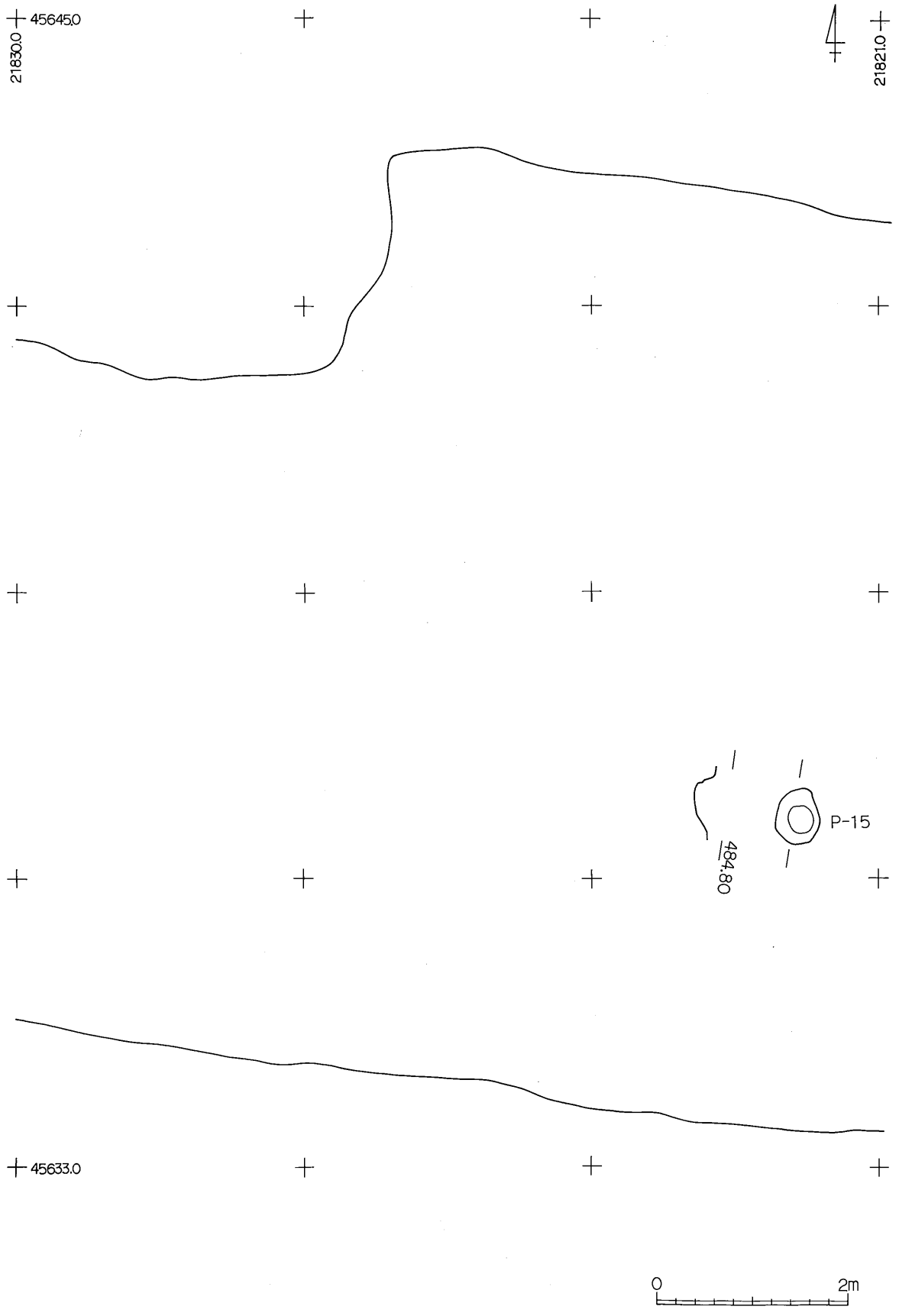
第3図 八幡裏遺跡I発掘調査位置図



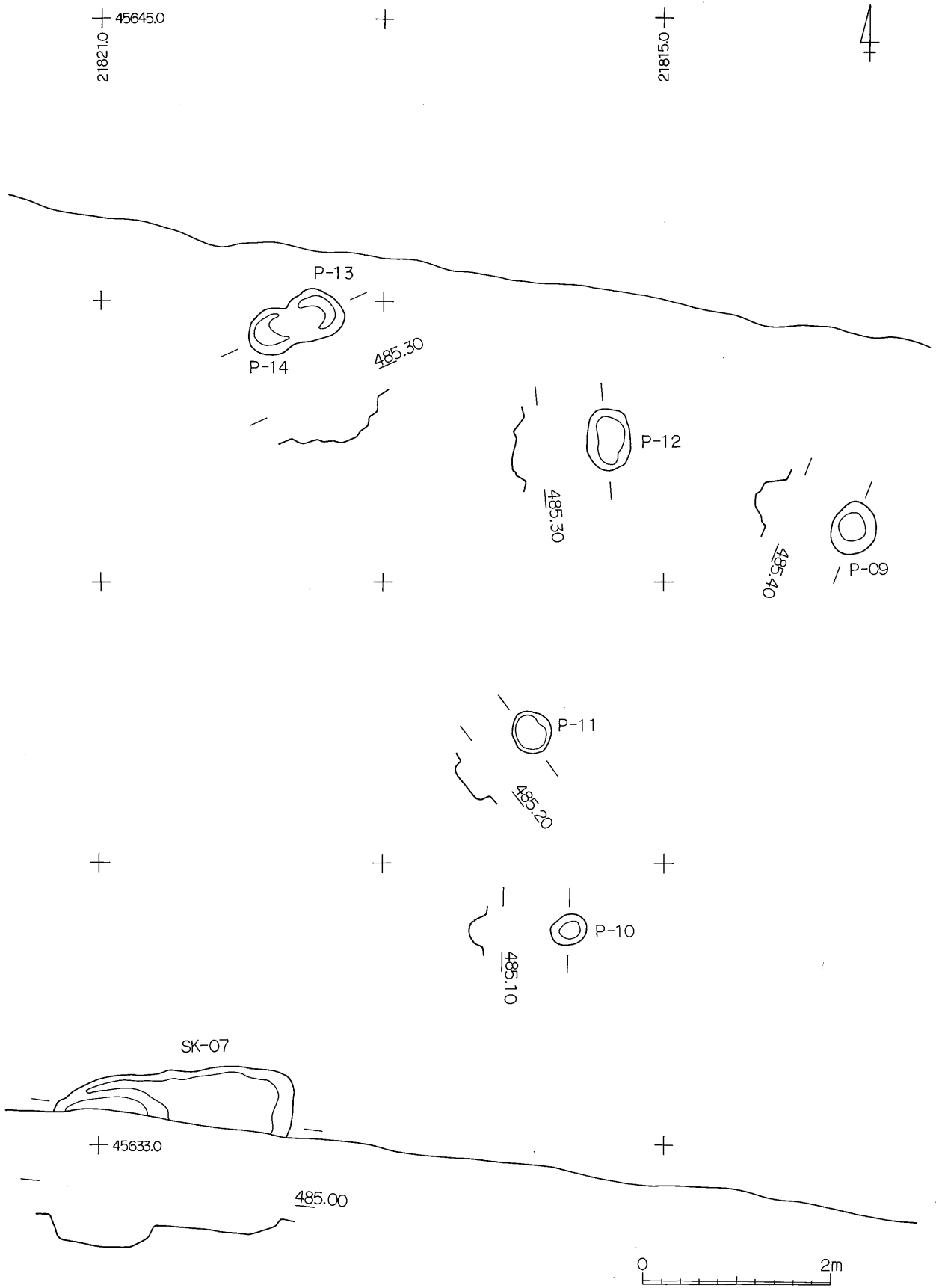
第4図 八幡裏遺跡Ⅰ発掘調査遺構図(1)



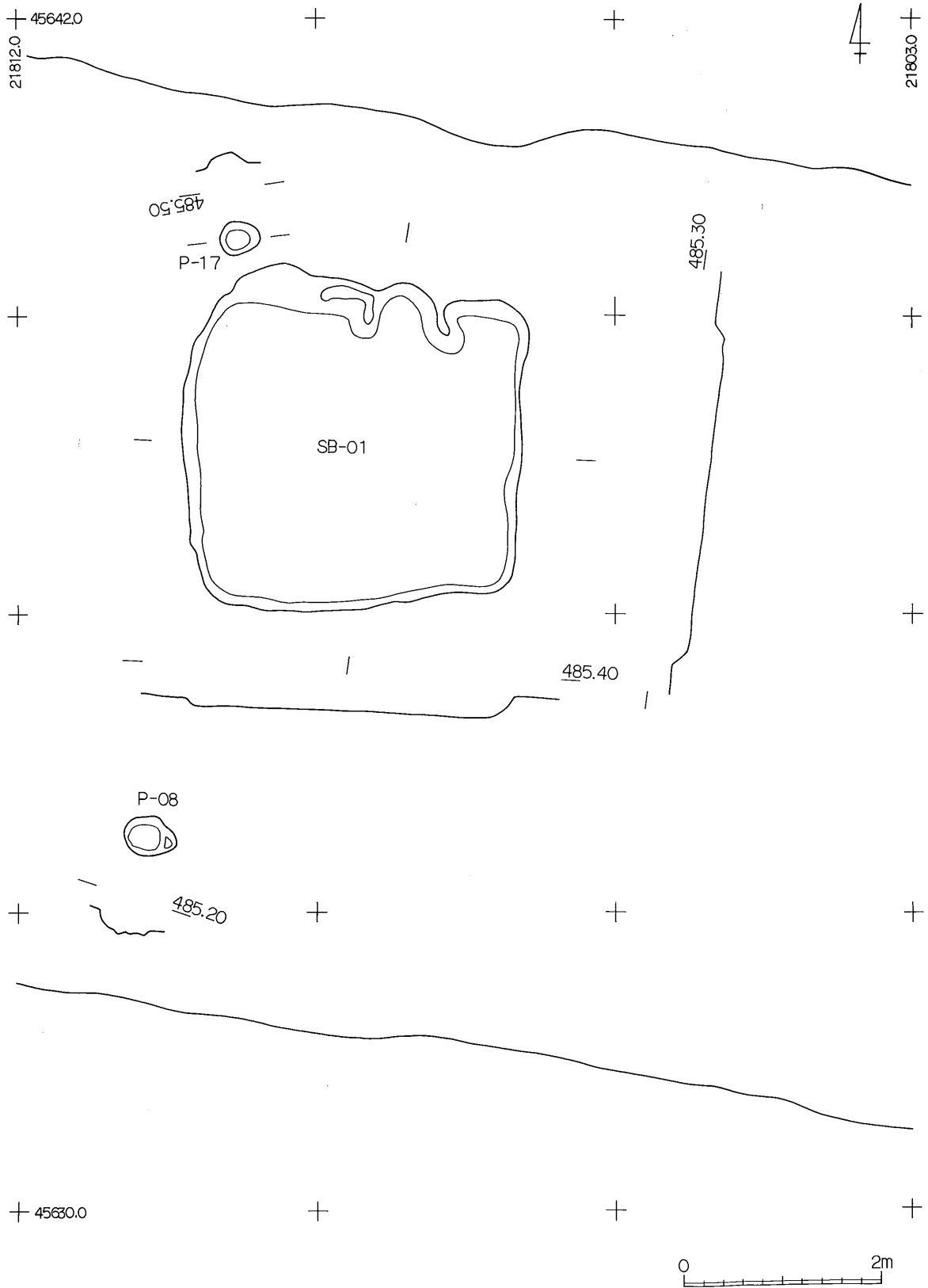
第5図 八幡裏遺跡 I 発掘調査遺構図 (2)



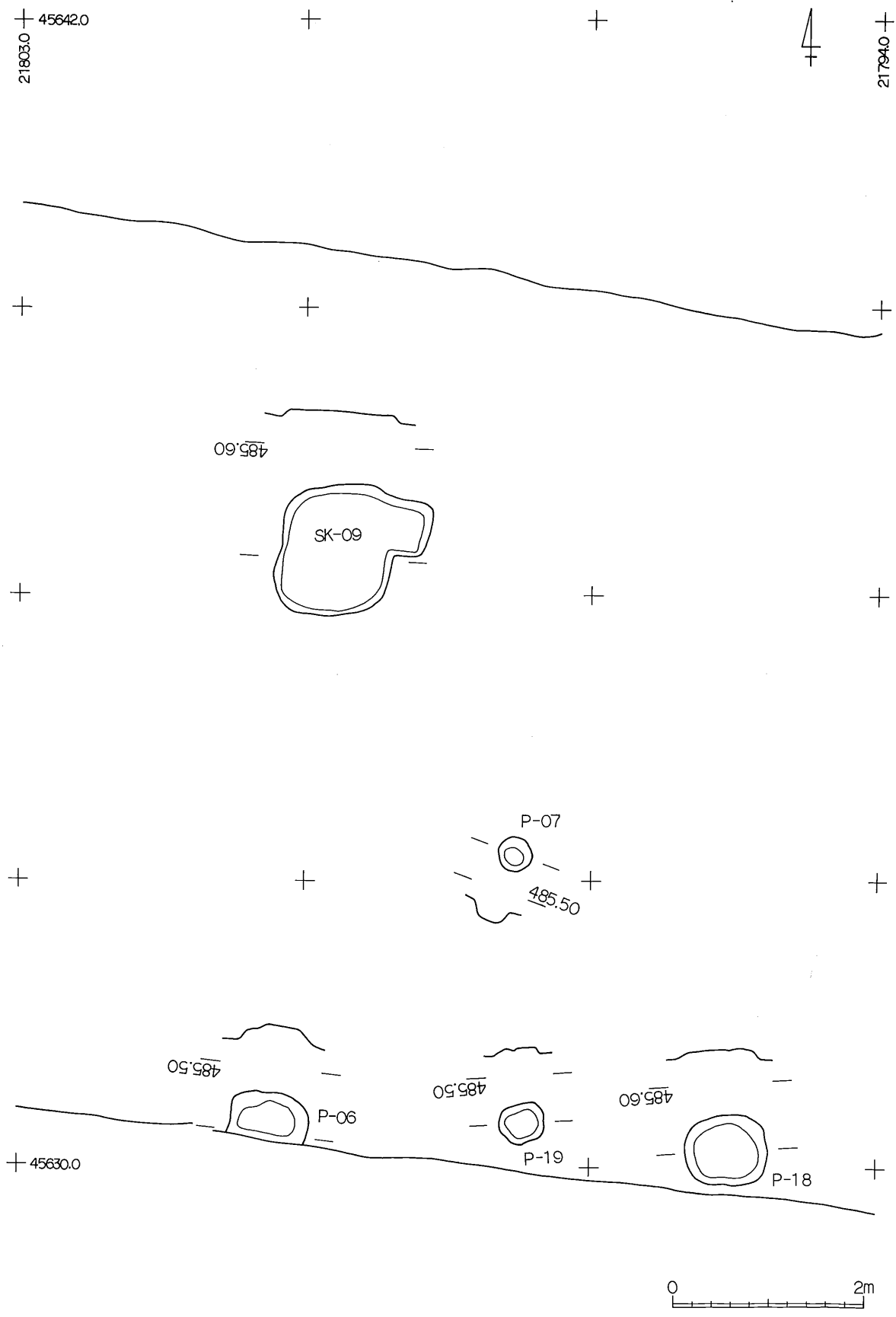
第6図 八幡裏遺跡 I 発掘調査遺構図 (3)



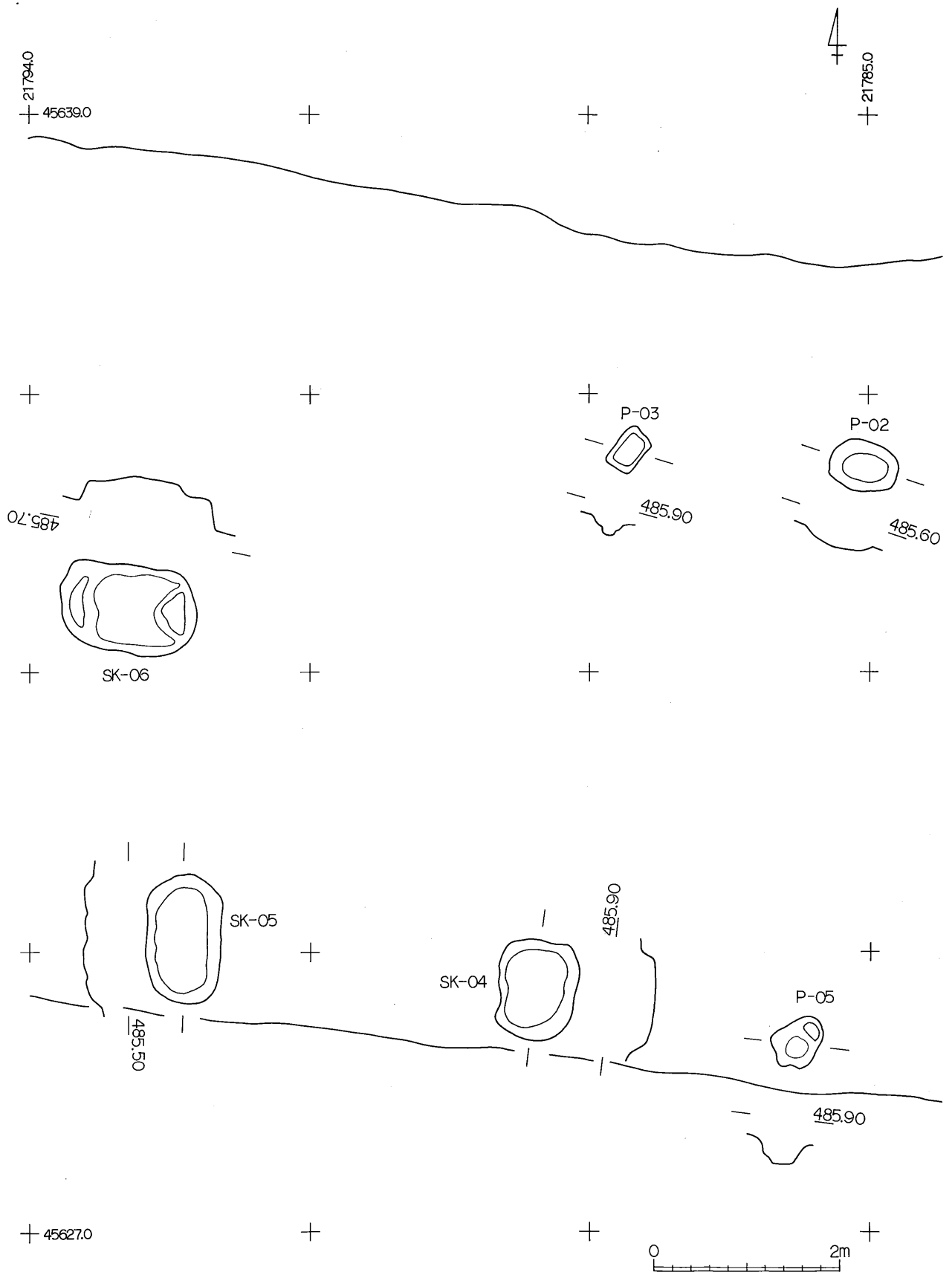
第7図 八幡裏遺跡 I 発掘調査遺構図 (4)



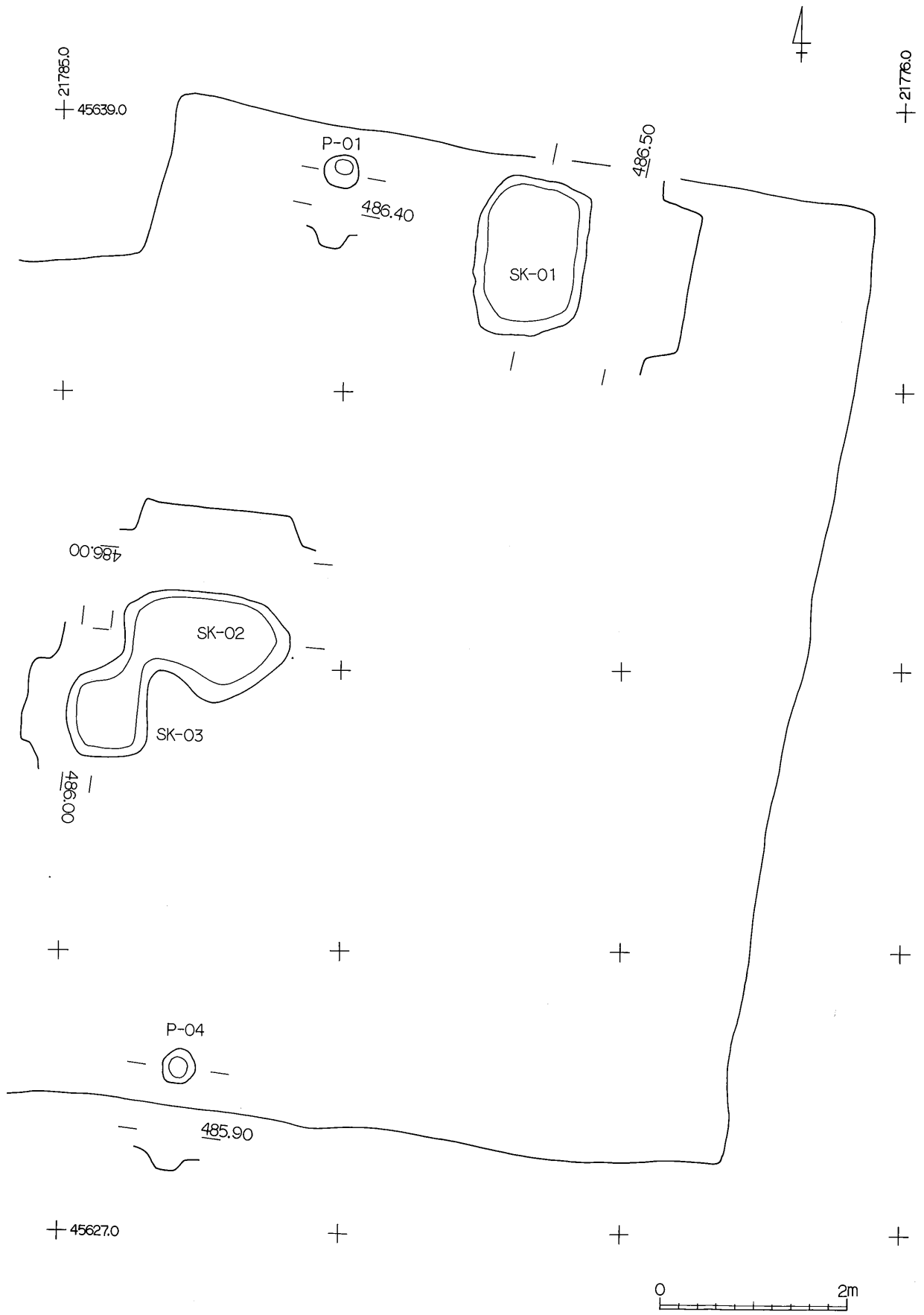
第8図 八幡裏遺跡I発掘調査遺構図(5)



第9図 八幡裏遺跡 I 発掘調査遺構図 (6)

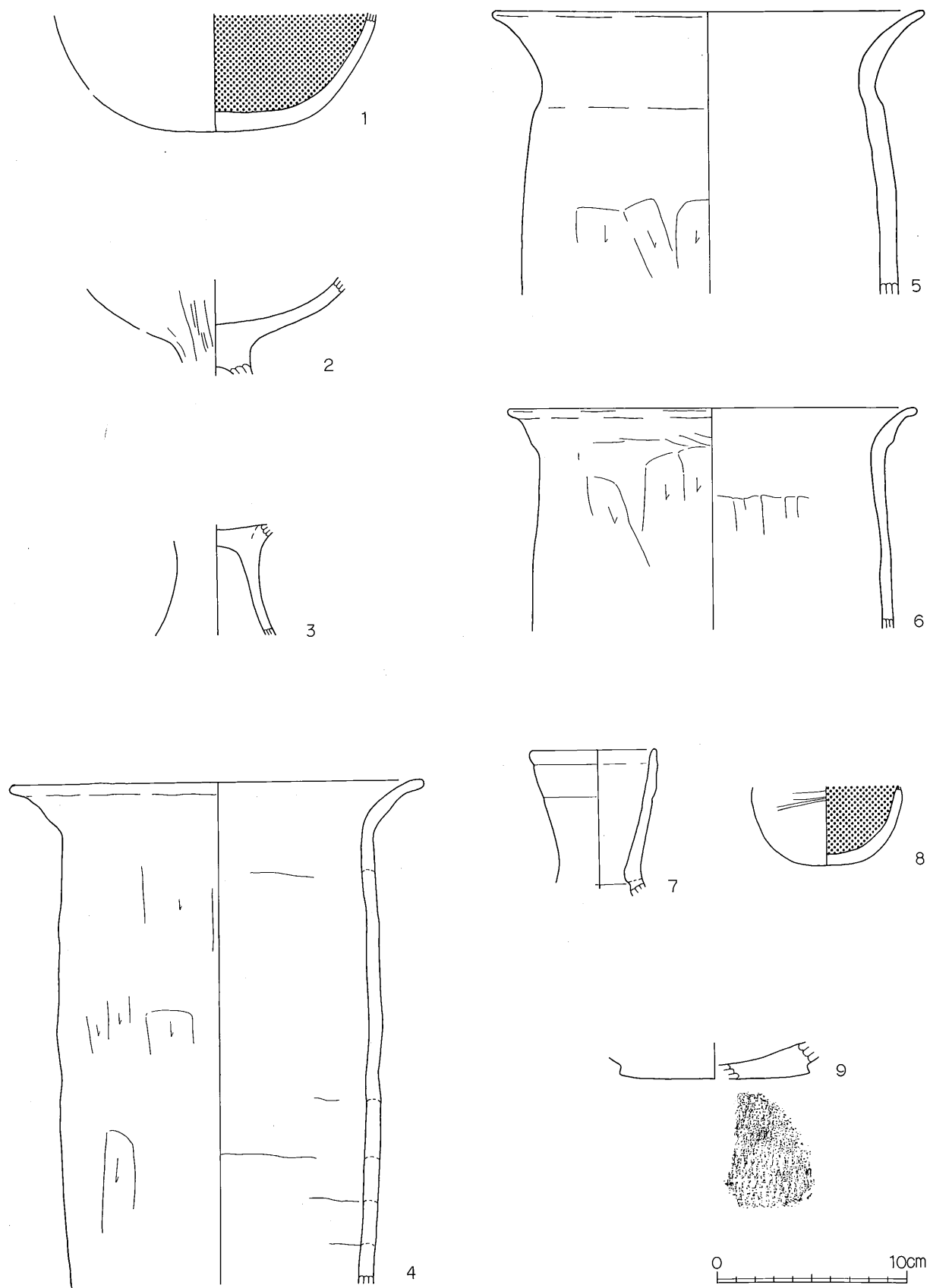


第10図 八幡裏遺跡I発掘調査遺構図(7)



第 1 1 図 八幡裏遺跡 I 発掘調査遺構図 (8)

2 出土遺物



第12図 八幡裏遺跡I発掘調査遺物図(1)

2 遺 物

遺構NO 図版NO 写真NO	器種 種類	法 量	器 質	成形・形態ほか	整 形 ほ か
SB-01 第13図-1 PL-3-7	坏 土師	口径 残高 6.2 底径 3.0 底部から体部の一部	胎;雲母、粗砂粒含む 焼;良好 色;(外) 2.5YR7/2灰黄色 (内) 黒色	丸底より体部は 内弯しながら立 ち上がる	(外) 体部撫で 底部回転篋 削りの後撫で (内) 横位の撫で、黒色処理
SB-01 第13図-2 —	高坏 土師	口径 残高 5.1 底径 接合部より坏部一部	胎;雲母、粗砂粒含む 焼;良好 色;(外) 10YR8/4 浅黄橙色 (内) 黒色	接合部より内弯 ぎみの体部に至 る	(外) 木口状工具による撫で (内) 黒色処理
SB-01 第13図-3 —	高坏 土師	口径 残高 5.8 底径 接合部から脚部	胎;礫、雲母、粗砂粒含む 焼;良好 色;(外) 7.5YR8/4浅橙色 (内) 7.5YR7/4にぶい橙色	接合部より脚部 は緩やかに開く	(外) 横位の撫で (内) 横位の撫で
SB-01 第13図-4 PL-3-8	甕 土師	口径 22.0 残高 26.4 底径 口縁、胴部1/3	胎;礫、雲母、粗砂粒含む 焼;良好 色;(外) 5YR5/4にぶい赤褐色 (内) 5YR6/6橙色	張りの無い胴部 より外反する口 縁部に至る	(外) 篋状工具による縦位の 削り (内) 篋状工具による撫で
SB-01 第13図-5 PL-3-9	甕 土師	口径 22.8 残高 15.0 底径 口縁部から胴部一部	胎;礫、雲母、粗砂粒含む 焼;良好 色;(外) 5YR6/6橙色 (内) 5YR6/6橙色	張りの無い胴部 より外反する口 縁部に至る 粘土帯積み上げ	(外) 口縁部横撫で、胴部篋 削り (内) 口縁部横撫で、胴部木 口状工具による撫で
SB-01 第13図-6 PL-4-10	甕 土師	口径 21.6 残高 11.7 底径 口縁1/3から胴部	胎;礫、雲母、粗砂粒含む 焼;良好 色;(外) 5YR6/6橙色 (内) 7.5YR6/6橙色	直立ぎみの胴部 より短く外反す る口縁部に至る 粘土帯積み上げ	(外) 口縁部横位の撫で、胴 部縦位の篋削り (内) 口縁部横位の撫で、胴部横位の篋削りの後、 木口状工具による撫で
SB-01 第13図-7 —	瓶 須恵	口径 6.5 残高 7.7 底径 口縁部から頸部	胎;粗砂粒を僅かに含む 焼;良好 色;(外) 2.5Y3/1 黒褐色 (内) 2.5Y5/ 暗黄灰色	口縁部に歪み	(外) 轆轤による撫で (内) 轆轤による撫で 自然釉が外内面に掛かる
SB-01 第13図-8 PL-4-11	ミニ 7珠 土師	口径 7.8 残高 4.2 底径 2.2 1/2	胎;石英、雲母、粗砂粒含む 焼;良好 色;(外) 7.5YR7/4にぶい橙色 (内) 黒色	丸底より内弯し て口縁部に至る	(外) 体部横位の篋磨き、底 部篋削りの後撫で (内) 横位の篋磨き 黒色処 理
P-14 第13図-9 —	? 縄文	口径 残高 1.9 底径 10.0 底部一部	胎;礫、雲母、粗砂粒含む 焼;良好 色;(外) 7.5YR7/4にぶい橙色 (内) 7.5YR7/4にぶい橙色	平底	(外) 底部に網代文様有り (内)

第3表 出土遺物一覧表



1 調査地調査前
(北東から)



2 バックホーによる
表土剥ぎ (西から)



3 SB-01 礎出土
状況 (東から)

P
L
2

4 SB-01完掘
状況（東から）



5 SK-01完掘
状況（南から）

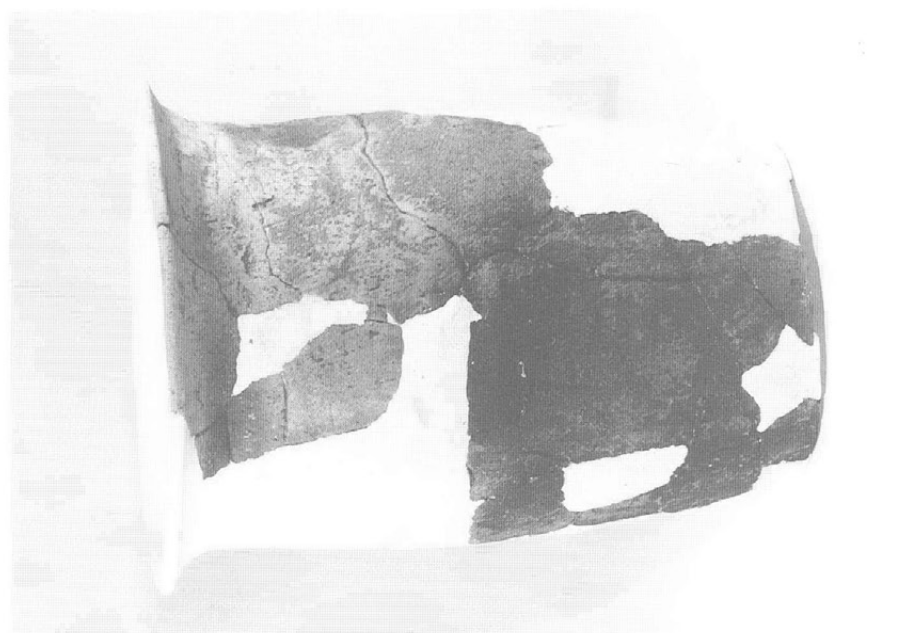


6 調査終了
（東から）

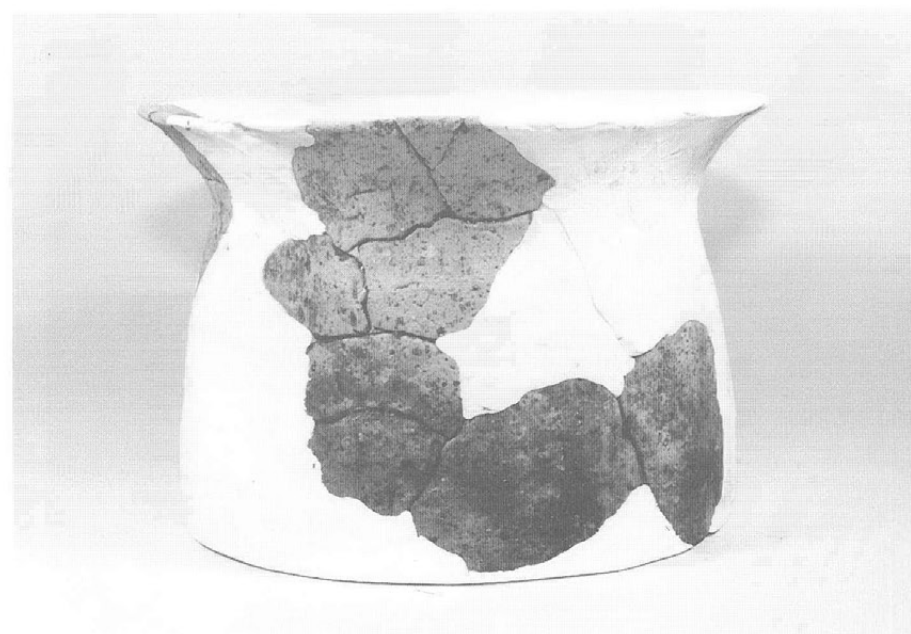




7 SB-01 坏
第13图-1



8 SB-01 甕
第13图-2



9 SB-01 甕
第13图-5

P
L
4



10 SB-01 甕
第13図-6



11 SB-01
ミニチュア 甕
第13図-8



12 作業風景

上田市文化財調査報告書第53集

八幡裏遺跡 I

長野県職員住宅建設事業に伴う
八幡裏遺跡発掘調査報告書

発行 平成7年3月25日
上田市教育委員会
長野県住宅供給公社
印刷 有限会社竹内印刷所
